

算命学中庸

【初年】 5 回目

5 回目の授業はこのページからです。

授業科目 【生剋比論】 しょうこくひろん

【初年】 5 回目 【生剋比論】 『相生』 01

【生剋比論】 では『相生』『相剋』『比和』の基本的な考え方を
まなびます。

📎 『相生』からはじめます。

「五行 ごぎょう」という言葉がでてきます。

五行 ⇒ (木性) (火性) (土性) (金性) (水性) という、5 つの性質を
意味します。

自然界には（木性）（火性）（土性）（金性）（水性）という「五行（木火土金水）」が存在します。

「^{ごぎょう}五行」の（木火土金水）を（もっかどごんすい）と、
^{こしょう}呼称します。〔続けて読むときです〕

その「五行」のあいだには、『^{そうしょう}相生』『^{そうこく}相剋』『^{ひわ}比和』という相関関係が成り立ちます。

自然界の「五行」（木性）（火性）（土性）（金性）（水性）を研究していくうちに、『相生』という関係がそれらのなかに存在することに気がついたのです。

五行（木火土金水）のなかに『相生』という関係が存在する

五行（木火土金水）の順番を考えますと、はじめは木性です。木性（木が燃えると火になります）

木性が燃えると（木生火 ^{もくしょうか}）という関係になります。

この状態は、木が火を ^{しょう}生じる姿であり、木は火になります。そこで木性は火性を生み出す（生じる）ことができるのではないか、というふうに考えたのです。

㊦ (木^{もく}生^{しょう}火^か) という関係を (木→火) と矢印で表します。

木 → 火 土 金 水 宿命 (1) 相生

木性が (木^{もく}→火^{しょう} もくしょうか) と火を生み出します。

そして、燃えた火は燃え尽きると灰^{はい}になります。

灰になると、自然界では土に戻るはずですが。

〔たとえば〕山火事で樹木が燃えてしまったとすれば、燃えているときは火性 (火炎) の状態です。

山火事で木が燃え尽きて、灰になれば、その燃えカスはすべて土になります。

それゆえに、火性は (火→土^{かしょうど}) と、土を生み出すことができるのではないかと考えたのです。

土が固まると金性になります。

木 → 火 → 土 金 水 宿命 (2) 相生

(火→土) ⇒ この姿を (火→土^{かしょうど}) といいます。

土性が固まって岩石になり、あるいは鉱物になり、金性の性質のものを生み出すことができるのではないかと考えまして (土→金^{どしょうきん}) ➡

木 → 火 → 土 → 金 水

宿命（3）相生

（土→金）⇒ この姿を（土→^{どしょうきん}金）といいます。

つぎに、金性が水性を（^{きんしょうすい}きんしょうすい）と生み出します。

木 → 火 → 土 → 金 → 水

宿命（4）相生

（金→水）⇒ この姿を（^{きんしょうすい}金→水）といいます。

この金性が水を生みだす⇒この部分はすこし理解しにくいと思います。
のちほど再度ご説明します。

⇒ そうしますと、五行の最初に出てくる木性は燃えると火になって、火が燃え尽きると土となり、土は塊^{かたまり}になると金性になり、金は水を生み出します。

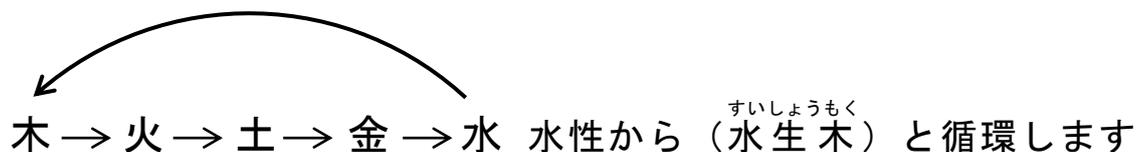
水を生み出して……これで終りではありません。

すぐそれに続いて、再循環を繰り返します。

つまり、また（水→木）と、元に戻って……水は樹木を育てるといのように循環します。

その流れの姿が、つぎの宿命（5）相生です。

宿命（5）相生



自然界の木火土金水は、宿命（5）相生のような姿で循環しているのではないかと考えたのです。

☞ さきほどの この金性が水を生みだす⇒この部分はすこし理解しにくいと思います。のちほど、再度ご説明します。

「この金性が水を生みだす」という部分ですが、金性というのは、おもに金属・鉱物のことを意味しますが、氷とか雪の結晶も金性に入ります。



氷が溶けて水になれば水性に分類されますが、水が個体状態になったものは氷とか雪です。

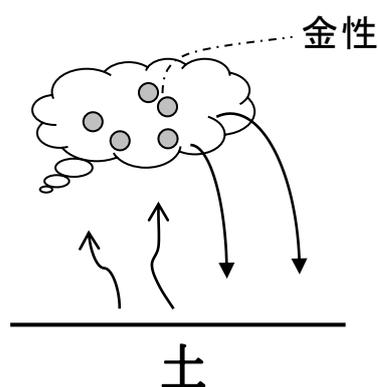
氷とか雪は塊かたまりなので金性的な質と考えています。五行に分類するときは金性に属します。

☞ 水については……昔、中国の人達は「水はどこから来るのか？」ということ考えたわけです。

〔たとえば〕川の水を調べて見ると、川の上流に^{さかのぼ}遡ってその水源をたどって行くと、山の上に降り積もった雪や、氷がたくさん存在しています。

雪・氷は金性といいましたが、それが少しずつ溶けて、水となって流れて来たものが、川だということを理解したわけです。

天から落ちてくる水はなに……自然界では雨も水です。その雨が降って来るのはどうしてなのかと考えますと、地面（土）があります。



宿命（7）相生

地面は土性に属します。

土に日光が当たると、地上から水分が蒸発して上昇します。

地面が温められると水分は蒸発して空に昇って行きます。上空は寒いので冷やされて、小さな氷の粒とか雪の結晶になります。この粒の状態が^{つぶ}金性です。この水の結晶が

ある程度の大きさになると、重くなって地上に落ちてきますが、水の粒が落ちる途中で、溶解したものが雨になります。

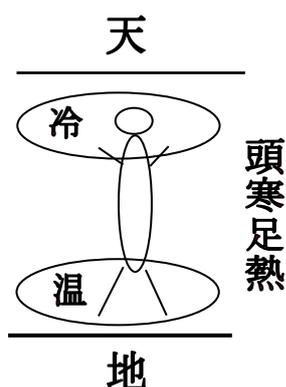
ようするに、地面が温まると水分が蒸発して、上に昇って行けば行くほど寒くなりますから、天で冷やされて氷の粒になります。粒になると重くなるから落ちて来ます。

……五行でいえば、水は土性から（土→金）と金性にいき、金性から（金→水）と水が生み出される姿になります。

自然界は、この五行の順番とおなじ循環じゅんかんのやり方をしていないか……というふうに考えたのです。

それで「金性が水を生みだす」という結論にたどりついたので。

⇒ 余談ではありますが…… 宿命（8）



この話を天と地というふうに分けます。地面が温められると、水分が上に昇って行きます。水分が上に昇って行くと、天空は非常に寒いので凍って氷の粒になります。

粒になると、重いから落ちてきます。

また、地上で温められると上に昇って、上で冷やされると粒になって落ちてくる。という循環が繰り返されているのです。

⇒ [天] と [地] と [人間] を、この状況を当てはめたところ、「人間は天と地の間で生きている」というふうに考えていたのです。

「天と地のあいだで生きている人間」も、**宿命(8)** とおなじように、下を温めて、上を冷やせば、身体のなかの血液循環も円滑に行くのではないかと考えたのです。それが「頭寒足熱」です。

この頭寒足熱の考え方は、もともと自然界の水の循環から得たものだと言われています。下を温めて、上を冷やせば水の循環がスムーズにゆくわけです。

人間も自然物である以上は、下を温めて、上を冷やせば血液の循環も円滑に流れるのではと考えて…… つまり足を暖めて頭を冷やせば、体の中の循環が順調に行くのではないかと、というふうに当てはめたのです。

冬になると、冷え性の方は、足が冷えてなかなか寝付けないとか、そのような状態があると思いますが、足が冷えてくると自動的に頭が熱くなってきます。そうすると、よけいに頭が冴えて眠れなくなります。頭を冷やして、足を暖めるとよく眠れるそうです。冬に試してみてもいいでしょう……。

⇒ 五行の話に戻ります。

木は燃えると火炎になり、火は燃え尽きると土となり、土は固まると金となり、金は水を生み出して、水はまた木を育てる関係になっているのではないかと気がつきまして、このような関係を『相生』と名づけたのです。

『相生』というのは……。

〔たとえば〕水が木を育てている状況を考えると、水が木を助けているような関係だともいえます。

焚き火をしているときに、薪たきぎをくべると、火はより強く燃えます。これは薪まきが火を助けているようなものです。それゆえに、相生は助けるような関係ともいえます。

『相生は助けるような関係』というふうに考えるのが基本です。

相生を言葉で表現するときには……「木は燃えると灰になって、火は燃えると土になって」このような言い方をしません。

相生の（生^{しょう}）という字をつかいます。

木が火を生じる ⇒ これを（木生火^{もくしょうか}）といいます。

（木性が火性を生^{しょう}じる）とか（火性が土性を生^{しょう}じる）

とか、このように（生^{しょう}じる）という言い方をします。

もっと簡単にいうときは――。

木と火の関係を例^{れい}に取りますと、木が火を生じる関係を、木と火の間に（生）を入れまして、（木生火^{もくしょうか}）という言い方をすることが多いのです。

木と火のあいだに（生）の文字を入れるだけです。

五行〔木 火 土 金 水）あいだに、（生）という字を入れて読みますと、つぎのようになります。 ➡

木生火 (もくしょうか)

火生土 (かしょうど)

土生金 (どしょうきん)

金生水 (きんしょうすい)

水生木 (すいしょうもく)

このようにいいます。

この言い方が出てきたら、『相生』のことだと思ってください。

㊦ また (生) という字の代わりに、矢印 (→) で表すこともできます。この矢印を (しょう) と読みます。

⇒ 相生を横書きで、矢印で表すとつぎのようになります。

宿命 (9) 相生・横書き

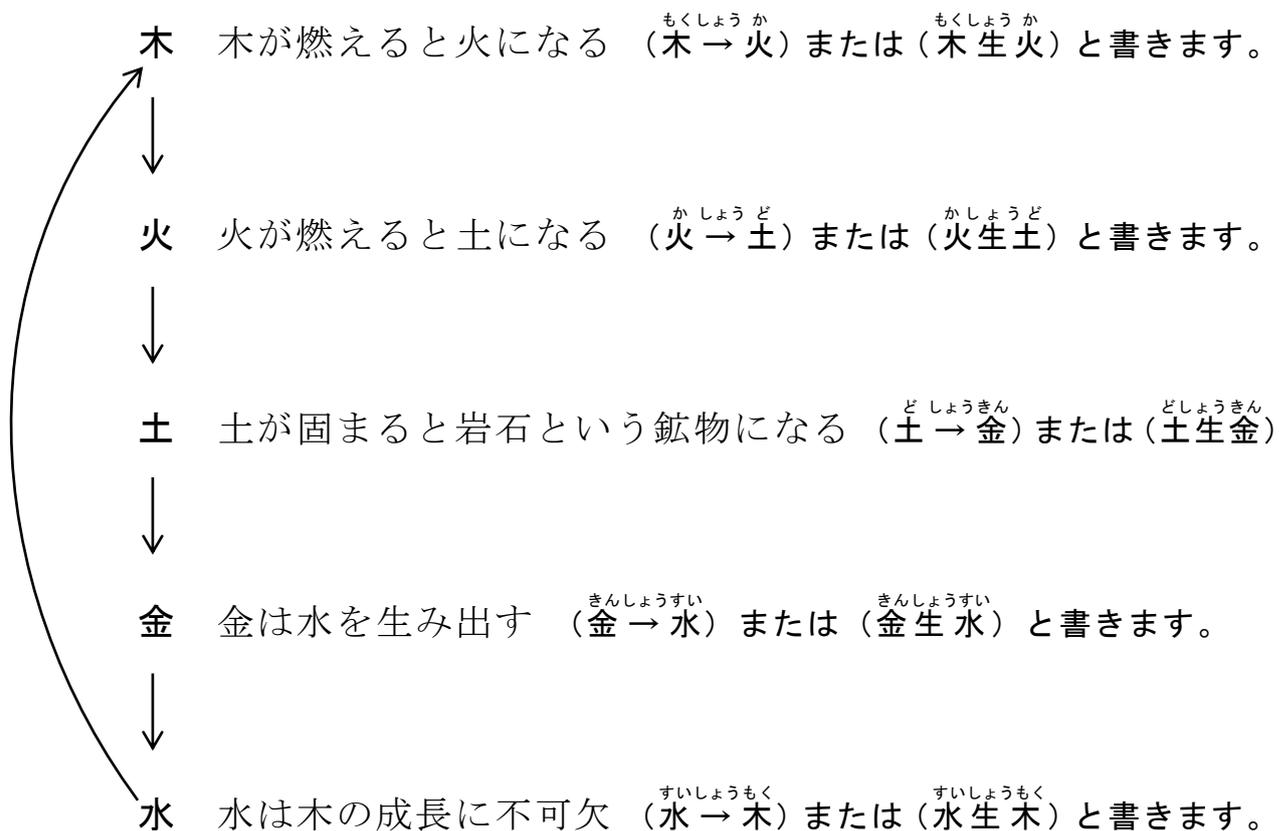
横書き ⇒ 木 → 火 → 土 → 金 → 水

ここでは (木→火) から始まって、そして、引き続き (水→木) と循環します。

横書きでも、縦書きでも、読み方・考え方はおなじです。

⇒ 縦に書いても（上から下へ）木 火 土 金 水 の順番になります。

宿命（10）相生・縦書き



通常、私たちは（木→火）と書いて（もくしょうか）と読みます。

（木生火）と書くよりも、（木→火）と書くほうが、圧倒的に多いです。（ ）を書く、書かないは自由です。

このように（木→火）と木性が火性を生み出して、（火→土）と火性が土性を生みだして、（土→金）と土性が金性を生み出して行きます。このような姿を人間に当てはめて考えると ➡

親が子を生ま出して、親が子供を助け、育てていく姿ともいえるのです。その子供がまた、結婚して自分の子を生ま出して、その子を助け育てる姿です。

このような相生関係を占うときは、その人の宿命の干支に人物を当てはめて、その親子関係の状況を観ていくようになるわけです。

☞ 人間関係で、おもに親子の関係などを占うときには、相生関係を実際の親子関係に当て嵌めるとか、それに関連する技法をつかって占うようになります。

これから、だんだんと占技が出てきますけど、「相生は助けるような関係」という意味合いを基にして、より深い占いにつながって行きます。

現在の段階では、『相生』は『助けるような関係』という意味だと、思っていてくだされば大丈夫です。

生剋比論『相生』 終わります。

⇒ 『相剋』^{そうこく} の授業です。

五行には『相剋^{そうこく}』という関係があります。

相生^{そうしょう}は助けるような関係だったわけですが、それに対して、相剋^{そうこく}はやっつけるような関係です。

まずは、このように考えておいてください。

相生のところでは（木→火→土→金→水）の順番で相生になっていました。

これを1つ飛ばすと、相剋という関係になります。

木性から1つ飛ばすと、土性に行きます。

宿命（1）相剋



相剋^{たど}の関係を例えていえば、木性（樹木）は土の中に根っこを張って、土を裂いて土のなかの水分や養分を奪います。

樹木が地中に根を張り巡^{めぐ}らせて行く状況をいえば、木性が土性をやっつけているような、あるいは苛^{いじ}めているような関係だといえる。そのように考えたのです。

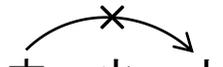
相剋関係をあらわすときは、矢印にバツテン（×）を付けると、相剋のマークだと覚えておいてください。

相生（→） 相生はただの矢印です。

相剋（×→） 矢印に × を加えたら相剋のマークです。

木性と土性の相剋は、木性が土の中の養分や、水分を奪っていく状況が、木性が土性をやっつけているような、あるいは苛めているような、そのよう関係ではないかと考えたわけです。

宿命（2）相剋


木 火 土 金 水 （木 ×→ 土）⇒（もっこくど）といます。

今度は、土性から1つ飛ばすと、水性になります。

土砂は水を堰き止めることができます。

あるいは、土が川の水を遮って、川の流れを変えてしまうこともできます。

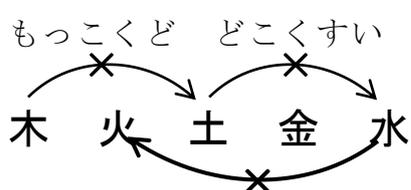
また、きれいな水を泥水にして汚すこともあります。

このような状態は、まるで土性が水性をやっつけている姿といえるのではないかと考えたのです。

宿命（3）相剋



⇒ つぎは、水から 2 つ飛ばして、相剋を見ると火性になります。

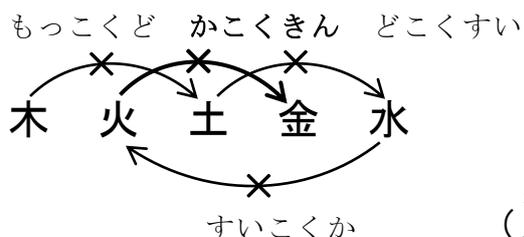


宿命（4）相剋

すいこくか (水 \rightarrow 火) (水 \rightarrow 火) の相剋関係

火に水をかけると火が消えてしまいます。あるいは、火に水をかければ火力が弱まります。その姿は火をやっつけることができるという関係ではないか、というふうに考えたのです。

⇒ 火から、もう 1 つ飛ばすと相剋で、金に行きます。



宿命（5）相剋

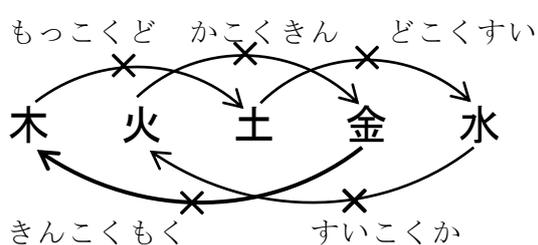
すいこくか (火 \rightarrow 金) (火 \rightarrow 金) の相剋関係

こうなりますと、火は金物を溶かすことができます。

どんなに硬質な鉄でも、銅でも、ドロドロに溶かしてしまうことができます。もっと硬い宝石のダイヤとか、ルビーも、火には弱いのです。宝石類は火に弱いというのが特徴です。

火で炙ると、ひび割れ、焦げたりして宝石が傷物になります。つまり、火は金をやっつけることができると思ったのです。

⇒ 金のつぎは、水と火の相剋（すいこくか）で、1つ飛ばしますので、五行のはじめの木性にもどって（きんこくもく）です。



宿命（6）相剋

（金剋木）（金 →×→ 木）の相剋

つまり、金から飛ばすと（金剋木）で木性に行きます。

金物は硬いので、樹木を傷つけることができますし、あるいは、木を切り倒してしまうこともできます。

斧でどんな大木でも切り倒してしまうことができます。

刀でずたずたに幹を傷つけることもできます。

〔金性は木性をやっつけることができる〕と考えたわけです。

このような関係を『相剋』と名づけました。

⇒ 相剋〔火は、金あるいは鉄や銅をドロドロに溶かしてしまう関係〕ですが、その状態を〔火は金と溶かす〕とか、そのような言い方はしません。（かこくきん）とといいます。

その姿を「火^{かこくきん}剋金」あるいは（火→~~×~~→金）と書きます。

⇒ 占いのうえでは、火性が金性を溶かす関係・やっつけるような関係を〔火は金を^{こく}剋す〕として、火^{かこくきん}剋金とといいます。

火性が金性を剋す、相剋関係は ⇒（火→~~×~~→金）と書いて（かこくきん）とといいます。

あるいは、木性が土中に根を張って、土を^{くだ}砕くような関係というのは、（木^きは^{つち}土を^{こく}剋す）⇒（もっこくど）とといいます。

^{もくせい}木性が^{どせい}土性を^{こく}剋す

⇒ 相剋の「剋」という字をつかい、^{こく}剋すという言い方をします。
（木性が土性を剋す）とか、（水が火を剋す）とか、このような姿を（剋す ^{こく}す）とといいます。

もっと簡単に書くと、（木性と土性）を例にすれば、（木性）と（土性）のあいだに『相剋』の〔剋〕という字を入れて——木剋土（もっこくど）とといいます。

相剋関係は、木火土金水のあいだに〔剋〕という字を入れればよいだけです。

あるいは、〔剋〕という字の代わりに、(→×) のように矢印に (×) 加えて、相剋を記号でも表します。

この (×) を〔剋 こく〕と読みます。

♪ 相剋関係を、声に出して読んで練習してください。

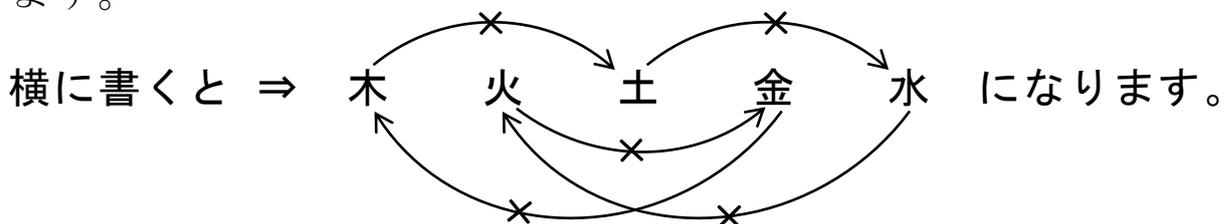
木剋土 (もっこくど) 土→×水 (どこくすい)

水剋火 (すいこくか) 火→×金 (かこくきん)

金剋木 (きんこくもく)

このような呼び方が出てきたら『相剋』だと思ってください。

⇒ 相剋の読み方と矢印の関係は 宿命 (7) 相剋 のようになります。



① 木→×土 (もっこくど)

② 土剋水 (どこくすい)

③ 水→×火 (すいこくか)

④ 火剋金 (かこくきん)

⑤ 金→×木 (きんこくもく)

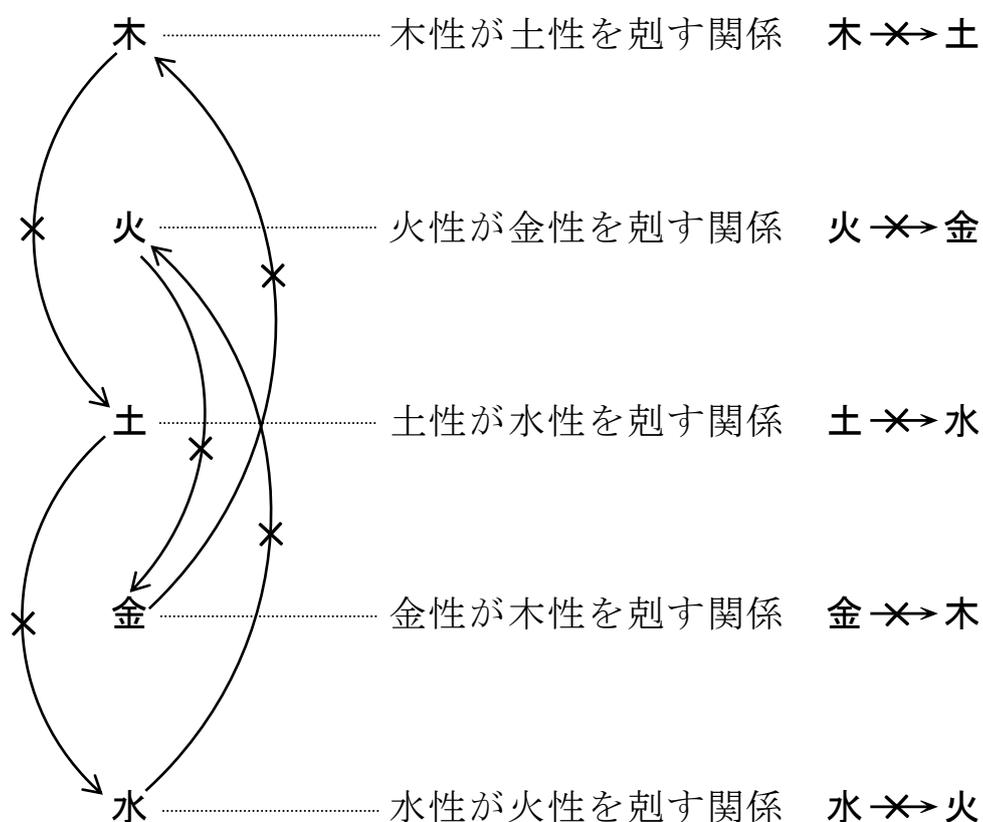
①②③④⑤のように書き、(このように) 言います。

〔横書きでも〕〔縦書きでも〕 考え方はおなじです。

縦に書いても(上から下へ) 木 火 土 金 水 の順番になります。

〔横書きでも〕〔縦書きでも〕 考え方はおなじです。

宿命 (8) 相剋



☞ ^{もっこくど} (木剋土) を (木-x->土) (木->x土) と書いたりします。

授業では『相生関係』の記述を (木->火) と書きます。

授業では『相剋関係』の記述を (木->x土) と書きます。

生剋比論『相剋』 終わります。

⇒ 『比和』^{ひわ} の授業です。

比和は『おなじもの同士の関係』『友達のような関係』です。
そのような関係を『比和』と名づけました。

比和 (ひわ)

木 = 木 木性と木性は比和の関係

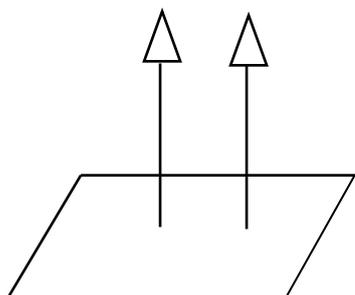
火 = 火 火性と火性は比和の関係

土 = 土 土性と土性は比和の関係

金 = 金 金性と金性は比和の関係

水 = 水 水性と水性は比和の関係

宿命 (1) 比和 のように、おなじもの同士が比和です。



宿命 (1) 比和

[たとえば] 木性はほかの木性と比和です。
樹木が 2 本並んでいたとすれば比和です。

この 2 本の樹木 (比和の関係) では、お互いに助けたり、
生みだしたりの『相生』とか、やっつけたりする『相剋』
はおこなわれません。

宿命（1）比和 に描かれた図のように、おなじ樹木が 2 本並んで生えているとします。

その姿を例えて表現すれば、〔仲のよい友達同士のようなもの〕というふうに考えます。

おなじもの同士ということで、比和の関係とといいます。つまり〔友達のような関係〕と考えるのが基本です。

比和 ⇒ 友達のような関係

このように考えるのが、まずは比和の基本です。

㊦ 五行には『相生』『相剋』『比和』という 3 つの関係があることを、知っておいて頂ければよろしいです。

☞ 五行の（木火土金水）の順番どおりであれば『相生』です。

☞ （木火土金水）を 1 つ飛ばしだったら『相剋』です。

☞ おなじもの同士は『比和』です。

☞ 『相生』『相剋』『比和』の関係は、これからの様々な占いに
つかっていくようになります。

☞ 占いをするには、生年月日を基^{もと}にして宿命を出します。

※（宿命を出す方法は、のちほど勉強します）。

宿命を見て……あなたの「日干」は木性だとか、「日干」は火性だとか、土性^{どせい}だとか、「あなたの宿命は金性^{きんせい}が多いわ」とか、その宿命に五行を当てはめて、見ていくようになります。

〔たとえば〕自分の宿命をだして見たら、「日干」が木性^{もくせい}だとします。

そして、自分の宿命のなかに出て来た、自分の母親は火性^{かせい}と出てきたとすれば、自分は木性で親は火性ですから、相生で（木→火）^{もくしょうか}という相生関係が成り立ちます。

「日干」は自分自身を意味しますから、占うときには、自分を（木性）として占います。

自分が（木性）で、親が（火性）であれば、自分と親との関係は、自分が親を助けるような関係になります。

いいかえれば〔親の面倒^みを看てゆく、というような関係になりますよ〕と、占ったりします。

それが良いとか、悪いとかは別な話です。

または〔あなたは母親のことを気遣う人ですよ〕とか、さまざまな意味合いが、占いに出てくるわけです。

☞ 陰占における「日干^{にっかん}」についてですが、「日干」というのは自分自身のことです。

〔たとえば〕「1900年〇月〇〇日」という生年月日の人物がいたとします。その生年月日を基にして宿命を出します。

※（宿命を出す方法は、のちほど勉強します）。

宿命（日干が甲木）のように、この人の日干^{にっかん}は「甲木」です。

日干は自分自身を意味します。

甲 〇 丁^{ねんかん} ここは親の場所で年干といいます。
〇 〇 〇 年干に「丁てい」と書いてあります。

☞ この宿命は、日干（自分）が「甲こう」で、親は「丁てい」としか書いてありませんが、宿命には自分の場所、子供の場所、親の場所とかの決まりがあります。

日干は自分自身の場所であり、「十干^{じっかん}」の1つ「甲こう」と書いてあります。

「十干」とは「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」の10個の記号のことです。

「甲」五行の木性をつけて「甲木 こうぼく」といいます。

「甲木」をものにたとえれば「樹木 じゅもく」を意味します。

親の場所には「十干」の1つ「丁てい」と書いてあります。

「丁てい」というのは、「丁火ていか」のことで、燃えている火を意味します。

「丁てい」は「十干じっん」の1つ「甲乙丙丁戊己庚辛壬癸」です。つまり、ここでは親を燃えている火にたとえますが、燃えている状態の火というのは、火の火源かげんになる薪まきがなければ消えてしまいます。

そうしますと、**宿命（日干が甲木）** は自分が樹木です。

親は火ですから、自分が火源まきの薪まきになって、親である火が燃え尽きてしまわないように（親を生しょうじる）（親を助ける）と書いてあるわけです。

☞『相生』は良くて、『相剋』は悪いとは、決まっていません。

相生・相剋・比和のそれぞれには、良いとか、悪いとかはないのです。その判断はその人の宿命によるのです。

あるいは、自分の生年月日を基もとにして、自分の宿命を出して見たときに、自分は木性で、親は土性として、出てきたりすることも当然あります。そのような姿は ➡

相剋関係であり、(木→×土 もっこくど) と、木性が土性をやっつけてしまう状態の相剋関係ですから、この親子の場合は、自分が親をやっつけるような関係になります。しかし「親をやっつける」という言い方は、好ましくなくて、普通はつかいません。

ではどのように表現するかといえば：

「貴方の宿命には、子供であるあなた自身が、親に反発するような子供になります」と書いてありますとか、

「あなたは親に対して^{きび}厳しく接するようになるでしょう」とか、このような言い方になるでしょう。

あるいは、自分の宿命をみると、自分は木性、親も木性だとすれば、五行はおなじ木性になります。

このように比和の関係になったりすることもあります。

この姿を端的に言えば、「あなたと親は友達のような関係になるでしょう」というふうに、占っていくようになるわけです。

実際には、さまざまな状況を想定できますので、必ず――、

このような言い^い様^{よう}になるとは言い切れません。

❖ 『相生』『相剋』『比和』のところで大切なのは、自分が木性で、親が火性だとすれば（木→火）の相生になります。これは自分が親を助けるような関係なので〔親孝行〕とか〔親を助ける関係は仲がよい〕とか、そのような事象を想定しやすいわけです。

❖ （木→×土 もっこくど）の相剋で、親をやっつけるような関係だとすれば、〔親と子供の仲が悪い〕とか、〔親にとって良い子じゃない〕とか、そのような印象を思い描くでしょう。

❖ 自分と親が比和だとしたら、友達みたいな関係ですから〔仲の良い友達みたいになっている親子だな……〕と、いうふうに思うかもしれません。

これらの解釈は間違っていないけど……正しくいえば『相生がよい関係』で『相剋が悪い関係』とは決まっていないのです。このことは先ほども触れました。

相生は〔助けるような関係〕だから良い関係だとか——
相剋は〔やっつけるような関係〕だから喧嘩しているよ

うな関係だとか——そのように考えたり、想ったりしやすいのですが、〔相生がよい関係〕で〔相剋が悪い関係〕とは決まっています。

相生関係が疎^{うと}ましくなるとか、相剋関係がありがたくなるとか、そう事象は多々あるのです。

『比和』がよいとか、悪いとかも決まっています。

原則 ⇒ 『相生・相剋・比和』の関係に良い悪いはない。

このことは、皆様が占いをするうえでとても大切です。

〔相生だからよい関係〕だ。そのような先入観を頭に入れてしまって、相談に来た人の運勢を観たときに「今年は、あなたと相生だからいい年ね」とか、占う人もいますが決まっています。ある事象にとっては良くて、ある事象にとっては禍^{わざわい}になることもあります。

『相生・相剋・比和』の関係がその人にとって〔良いことなのか〕〔悪いことなのか〕……その人の宿命によるのです。つまり、人によって異なるわけです。

『相生・相剋・比和』の関係が、どのような姿になっているのかは、個々の宿命を観てから判断するのです。

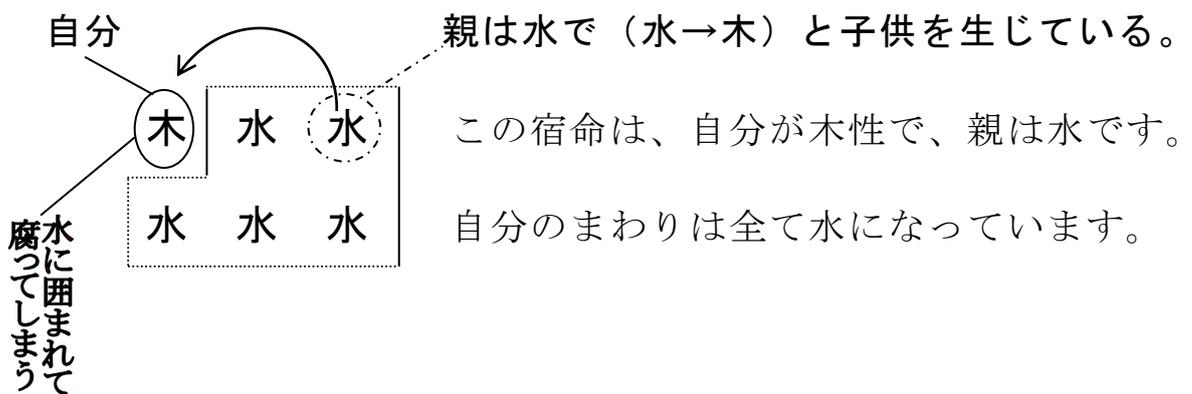
『相生』『相剋』『比和』の関係に、それが〔良い〕〔悪い〕と
いう意味はないのです。このことを覚えておいてください。

☞ 具体的な宿命の観方^{みかた}は、まだ勉強していませんので、
難しい部分があると思いますけど、**宿命（1）相生（水→木）**
を用いてご説明します。解りやすくするための極端な命式です。
〔たとえば〕自分自身が「木性」です。という宿命だと
すれば、つぎのような場合も多々あるのです。

☞ まずは『相生』です。

この命式なかでは、自分が木性で、親は水性です。

宿命（1）相生（水→木）



この宿命は、水が木を育てている関係です。

水がなければ、樹木（自分）は枯れてしまいます。

自分は木性で、親が水ですから（水→木）と、親が自分
を相生してくれています。（親が→自分を生じる姿です）

宿命（1）相生（水→木）のように、自分が樹木で、自分の周囲はすべてが、水・水・水という、水だらけの宿命もあるわけです。

この状況は——親が自分を助けてくれています。つまり「自分にとって有難い親」とか「とても良い親」そのように思いやすいです。

自分にとって、親と相生の関係が良い場合もありますが、親に相生されることが悪い場合もあるのです。

☞ 親の生年月日を基にして、親の宿命を出したときに、**宿命（1）相生（水→木）**のように、有り難くない**水**が、親に相当している場合が実際にありますよ。

これだけの水に「樹木（自分）」が相生されたらどうでしょう。自分は腐ってしまいます。親は有り難くない存在です。

そうしますと、**宿命（1）相生（水→木）**の場合はつぎのよう
にいえます。

親が「甲木」を助ければ助けるほど、この人の運勢はダメになる。

親が「甲木」を甘やかせば甘やかすほど、この人はダメになる。

それゆえに「相生して助けることが良いこと」だとは、決まっていないのです。

もちろん「相生されることで、立派な大木に成長する」宿命もあります。それは個々の宿命によるのです。

ほかの『相性』についても考え方はおなじです。相生して助けることが、良いことだとは決まっていないのです。

水に（水→木）と生じられて（育てられることで）立派な大木に成長する木性もあります。

それとは反対に 宿命（1）相生（水→木） のように、親から（水→木）と育てられることで、ドンドン運勢が腐って行く姿もあるわけです。

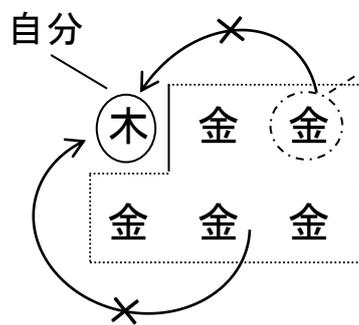
どちらになるのか——ということについては、その宿命を読んでキチンと判断しなければいけないわけです。このことは“とても大切”です。

☞ 『相剋』 はどうでしょう。

相剋は「やっつけるような関係」といいました。

〔たとえば〕 宿命をだすと、親が金性で、自分が木性でした。

宿命（1）相剋（金→×木）



親は（金→×木）と子供を剋している。

この宿命は、自分が木性で、親は金性です。

自分のまわりは全て金性になっています。

木性 自分 ←× 金性 親

矢印の方向を変えていますよ。

宿命（1）相剋（金→×木） の関係です。

この相剋関係は、親が金性ですから、親をものにととえて、斧とか刃物と考えてもよいです。自分は樹木です。親が刃物で、自分が樹木ですから「自分が親に切られてしまう」とか「自分が傷つけられてしまう」とか、そのように考えることができます。

親に切られて、運勢がダメになる

確かに（金→×木）と親にやっつけられて、この人物がダメになってしまう。という場合もあります。

しかし……（金→×木）と親にやっつけられるということは、親に^{きび}厳しく鍛えられることでもあるのです。

親に鍛えられることで、自分が^{たくま}逞しく育って行くこともあるわけです。

親に鍛えられて、立派な人になる

このようなことは実際にあります。

樹木は枝葉が茂りすぎて密生すると、幹に負担がかかり過ぎて、弱ってしまうそうです。

それゆえ、夏になって枝葉が茂りすぎると、枝を切り落とす作業（枝打ち）をすると、立派な樹木に育ちます。

人間もそれとおなじです。

（金剋木）（金→×木）と鍛えられて立派な人物に育っていくという可能性もあるわけです。

ただし“メタメタに剋す”ということではないですよ。

☞ ほかの『相剋関係』もすべてそうです。

めったやたらに剋されて、ダメになる宿命の人もいれば、

剋されても（厳しく鍛えられる）負けずに、順調に伸びてゆく宿命の人もいるのです。

そのどちらになるのかは、宿命をキチンと観て、判断をしなければいけないわけです。

それゆえに『相生』がよくて、『相剋』が悪い、というのは決まっていません。

☞ このことは、実際の親子関係を考えても理解できるはずですが。

子供を助けることが良いとは決まっていません。

子供を甘やかすことが良いとは決まっていないのです。

子供をやっつけることが、つまり、厳しく接することが悪いことだとは、決まっていません。

もちろん、悪い場合もありますけど、良い場合もあるわけです。

それは「人によって違う」「宿命によって異なる」ということを、知っておいてください。

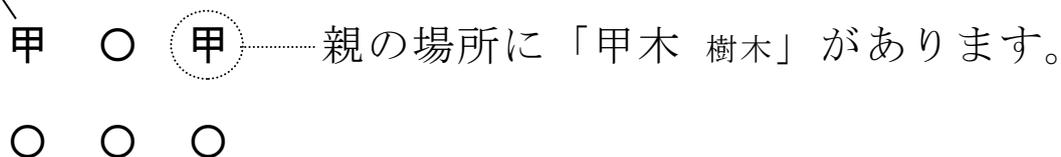
『比和』もおなじです。➡

⇒ 『比和』 もおなじです。

〔たとえば〕 自分が木性で、親も木性だとします。

日干「甲木」樹木で自分自身

宿命（1）比和



「甲木と甲木」は比和です。

このような宿命の人もあります。

自分も木性で、親も木性ですから、この親子は比和です。

そうしますと、この親子は〔友達のように仲の良い関係〕ともいえませんが、反対に〔仲が良いとはいえない関係〕という場合もあります。

それはどうしてなのかといえれば……『比和』になっている場合、これも大きく分けて2つの可能性があります。

① 友達のように仲の良い親子です。

〔友達のように仲がよい〕といえれば、聞こえはよいのですが、どうでしょう……？

② おなじもの同士というのは、ライバルになる可能性

〔おなじもの〕 というのは、常に競争相手になる関係が内在されています。実際の友達もそうです。

〔この人は私の友達です〕 あるいは〔会社の同僚です〕 同僚というのは、よくいえば友達ですけど、別の言い方をすればライバルです。

☞ 勉強が進みますと「侮光」という言葉が出てきます。

〔たとえば〕 日干「丁火」で、となりの月干に「丙火」がある宿命の人は…… **宿命（2）比和・侮光**

日干「丁火 ていか」 火炎で自分自身

丁 丙 ○ 自分のとなりに「丙火 へいか」がいます。

○ ○ ○ 「丁火」と「丙火」はおなじ火性で『比和』です。

この宿命の姿を「丁火は丙火に侮光される」といいます。

もし、この宿命の日干「丁火」が女性であれば、昼間の合コンに友達と一緒にいかないほうが賢明です。

なぜかといえ、自分は丁火です。ものにたとえれば篝火のようなものです。（燃えている火は、夜なら目立ちます）

そのとなりに「丙火」がいます。

丙火はものにたとえれば太陽です。

昼間に…… 焚火たきびのような篝火かがりびと、太陽を比較すると、篝火は目立ちません。丁火と丙火は「五行」の火性です。

陰陽でいえば、火性の陰いんは丁火、火性の陽ようは丙火です。おなじ火性同士ですから『比和』の関係です。

自分「丁火」のとなりに座っている「丙火」は、自分とおなじ火性です。つまり『比和』ですから、丙火を兄弟・友人・同僚・同級生ともいえるわけです。

そうしますと、日干「丁火」の女性が、兄弟・友人・同僚と一緒に、昼間の合コンに行くと、友人や同僚の丙火のほうが目立ってしまうので、自分（篝火）は目立たなくなるわけです。

「丁火 燃えてる火炎」は、昼間は目立たないけど、夜になると目立ちます。夜は「丙火 太陽」は消えてしまい、「丁火」のような灯火とうかが目立ちます。

このように考えることもできるわけです。

ぎやくぶこう
(逆侮光ぎやくぶこういう宿命もありますけど、これは別の話です。)

「彼、あるいは、彼女は同級生」です。とはいっても、おなじクラスの同級生というのは、よく出れば友達同士ですが、悪く出たとすれば、勉強にしても、運動にしてもライバルになります。

それゆえに、『比和』の場合には、競争相手になって争う可能性もあります。ライバルのようになり争う。

このことは女性に限ったことではなくて、男性もおなじです。

⇒ [木性は土の中に根っこを張って (剋くして)、土の中の養分や水分を奪ってしまう] といいました。

そうしますと、養分や水分が少ないおなじ土地に、樹木が2本生えていたらどうでしょう……？

少ない養分や水分を奪^{うば}い合う関係になります。

奪^{うば}い合う状況になってしまうこともあるわけです。

[相手を潰^{つぶ}して] [相手を壊^{こわ}して] 自分が養分や水分を総取り^{そうど}してしまう、という事態が運勢のうえでおこなわれる親子もあります。このような事象は夫婦のあいだで行われる人もいますし、兄弟で奪^{うば}い合う人もいます。

『比和』は、確かに友達のような関係といえますけど、それがよい関係とは決まっていないということです。

⇒ 勉強が進みますと——。

〔実際に、運勢上ではどのような状況が起こるのか〕 ということを占えるようになります。

そのときに——『相生だからよい』 『相剋だから悪い』 『比和だから仲良し』 そのような先入観を最初にもってしまくと、相剋だから悪い、という考え方に^{おちい}陥りやすいといえるのです。

^{きせいがいねん}既成概念ともいえる先入観を頭に入れてしまくと——、微妙に占いの答えがちがって来ることが多いです。

それゆえに『相生』『相剋』『比和』の関係だけを観て、〔良いとか〕〔悪いとか〕を語ることはできないのです。このように思っておいてください。

【初年】 5 回目【生剋比論】 『相生・相剋・比和』 終わります

つぎの授業 ⇒ 【初年】 6 回目【気について】